

内田魯庵全集

10

小 説 II

内田魯庵全集 第十卷

五二〇〇円

昭和六十年六月十日 初版

著 者 内 田 魯 庵

編 者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 ㈱常 川 製 本

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町
電話 (二九二)〇七九八
振替 東京四一六三一六〇

内田魯庵全集第十卷／小説Ⅱ・目次

電影	五
慾と慾	六九
青理想	一三九
隣同志	一六三
まのびね	一八五
破垣	二三五
葉ざくら	二六七
横ぐも	二八三
片時雨	三一
社會詩人	三八九
榮華の塵	四二九
婚後	五〇一
むかし氣質	五三三

家庭難		五六九
解題		五九七
解説		六〇一

小

說

Ⅱ

電

影

電 影

其 一

宮城みやしろの正南で殆んど全市を見晴らす高臺の大臣官邸の門から勢よく輓出くるました腕車うでぐるまは三十四五に見える豊満ぶとみした嚴格いっかくい顔の洋服紳士を載せて韋駄天のやうに飛んで、日本で名高い大富限の阿房宮めいた邸の角を折れて、東京で屈指ゆびさきの險しい坂を下りかけやうとする時、恰も坂下したから登あがつて來た小肥りに肥つた毛毬頭いぐるみたまの壯士風の背廣服の男が鐵欄の近眼鏡を輝らしながら見向きもせずには摺違はうとした。

『豊崎ッ、』車上の紳士は唐突いきなり顧盼こつぱんきさまに聲を掛けた。之から坂を下りやうと、梶棒を握つた腕に力を入れ踵を踏占めて身を反らした車夫は主人の聲にたち、と腕車を横にして駐つた。

豊崎と呼ばれた男は怪訝な顔をして佇立つた。で、小石を蹴返しながらッ、と二歩三步腕車の傍に近づき、首を伸ばして燦つく眼鏡の下に眩しさうな眼を細くして睨にらツと凝視め、

『おッ、島根君、』と周章て、鼠羅紗ねじの鳥打帽トリウチバウを握取つて軽く會釋した。で、復た慕かしさうにしげくと空みの開くほど凝視めて、『暫らく……非常に御無沙汰した。』

『奈何した？』と嶋根は莞爾かに微笑して、二人ながら一年振の意外き邂逅に暫らくは言葉なく互に顔を凝視め合つてゐた。車夫までが身体を横にして不測さうに二人の顔を代る／＼屬視めてゐた。

『朝鮮に行つてたさうだな。』

『はアツ、京城に半年も在ましたかナア……』と豊崎は復た暫らく言葉を途切らして面目なげに頭掻きつゝ眼の縁に皺を寄せ、『いやツ、悉く大失敗しました。』

『豪い活劇を演つたさうだな？』

『演らんです。演らん中に失敗したです、』と豊崎は澁い顔をして苦笑ひしつ、『這般な馬鹿な咄は無いですから我輩非常に赤面します。殆んど社會に顔出しが出来んです。』

『何處へでもドシ／＼出掛けて大法螺を吹立てるサ……あツ、長郷が頻に君の噂をしたツけ。』

『はアツ、長郷君相變らず健在ですか。實は貴處と長郷君の許だけ訪ねやうと思つてました。』

『むゝ、來るが好いやナ。歸つたなら直ぐ來さうなもんだに、何故來んかと過般も長郷と噂さしてゐたんだよ。』

『餘り馬鹿げてゐて話になりませんからナ。諸君に合はす顔が無いです。』

『はツはツ、性格に似合はぬ事をいふ。失敗は丈夫の面目だ。大威張で盛んに法螺を吹くサ。』と磊落に笑ひながら衣兜から袂時器を出して鳥渡と瞻視めつ、『何處へ、今日は？』

『何處へ行く目的もなく、唯だ茫然徘徊しておるです……二十世紀の屈原ですナ。』

『はッはッ、奈何だネ、久し振で午餐を相伴はんかい。最うそろ／＼正午だから……』

『爾うですナ、』と暫らく遠慮して躊躇つたが、思切つたやうな投調子で、『御馳走になります。實は暫らく美酒佳釀に遠ざかつとる。衆人皆酔ひ我れ獨り醒むです。』

『はッはッ、』と笑ひながら仇口に空耳を貸して、ヒ、ラ、リと腕車から飛下りた。で、腕車を背後に輓かして裕々と二人伴立つて坂の中途を右に折れ、柿の木の節瘤だちて黒堀越しに枝を伸ばす坂下の角に豊崎の首を棹り肩を聳かす後姿が隠れる時、何が笑止しくて乎、坂の上まで聞えるやうに傲然と高笑ひした。

其二

公園の翠滴たる森を透して見ゆる赤煉瓦の、此邊で政客の最も出入する俱樂部組織の割烹店の奥まりたる裏二階に食卓を隔てゝ寛座ぐは島根堯民と豊崎雄太郎と二人である。黒麥酒の空壇も三ツ四ツとなりて二人とも耳熱して興闌はに、島根はフロックコートノ釦鈕を悉く外して黄金鎖を横へたる白き綾の胸を現はし、豊崎は脊廣服を傍の椅子に投掛け襯衣一枚となつて鱗色絹の網紐をバンドウ代りに仰々しく房ざりと締めてゐた。

『人道險にして難。吉凶禍福相追躡して變轉極まりなきは殆んどカレイドスコープだ、』と豊崎は慨然として仰いで胸を叩いて長歎息した。で、息繼の麥酒を一口飲んで洋蓋を下に置き、『事多くは順に似て逆、意の慮るべからざる處に不測の禍が起るもので……實に君、我輩は慷慨に堪へんです。』

『公麼して失敗した——それほど熟した計畫が?』と島根は暫らくして氣の抜けた時分に嘴を入れた。
『例の爆裂彈事件ナ——ホラ王宮へ爆裂彈を投込んだ騒動ナ、』と豊崎は身を屈めて島根を見上げるやうに頤突出し、『あの騒動が突然持上つた、愈々明日明後日の中に我輩同志の計畫實行に掛らうといふ途端です……』

『君等は關係ないかネ、あの事件に?』

『全く關係が無いです。我輩同志が苟くも大事を舉ぐる林丙吉^{りんへいき}一輩と事を共にしませんナ。然るに君、亡命者が連座律反抗の運動だと風聞が傳はると、城門火を失して禍池魚に及ぶ、日本政府が復た例の神經を起して在韓日本人追放を公使館に訓令する。失敬極まる、何の關係も無い我輩同志までが連累を陷つて忽ち退韓を命ぜられたです……』

『何故争はんのだ、』と島根は悠然と葉良^{シガア}を燦らしながら足を伸ばしてグツの椅子の脊に倚掛りつ前額で睨むやうに肥と豊崎の顔を見た。

『一度は憤激しましたナ、』と豊崎は肩を怒らして言葉に力を入れた。『公使館の野郎と喧嘩しやうとした。次第に由つたら混雜^{じんとく}に乗じて事を舉げやうとした。しかし島根君、千金の貨を決する者は鉄兩の價を争はず。我輩同志苟くも千金の志を抱くものが鼯鼠^{わな}の蹄に陥るやうな無謀はしたくないですナ。それで暫らく時の來るを待たうと餘義なく無限の遺恨を抱いて仁川に下つたです……』

『七卿の長州落だナ、』と島根は笑ひながら恰も給仕人が運んだ新らしい皿に對つて、庖丁^{ナイフ}と肉刺とを

手に持った。

『日本の外交軟弱は朝鮮へと行くと解る。我輩すら實に愛想を盡かした。言語道斷ですな、』と豊崎は憤懣する如く肩を怒らし、我知らず庖丁持つ手に力を入れ過ぎてガチリと皿を滑らした。『爆裂彈事件でも解る。肝腎火元の朝鮮よりは日本政府の方が餘程狼狽しておる周章でた態ツたら左次郎茶目吉ですナ——（と苦々しげに憤悶して笑ひつ舌を吐きて）、商賣一方の堅氣な商賣の渡韓さへ嚴重に禁止する、在韓日本人は堂々たる信用ある紳士にすら歸國を命ずる。恰で隣家の夫婦喧嘩を疵病に病んで謝罪證文を出すやうな話です。それだから見た事か、一と月経たない内に渡韓禁止の勅令を持餘した駄たらくは實に滑稽極まる……』と一と息吐いて直ぐ言葉を更め、『露西亞なかは機敏ですナ。此騒動に乗機ついでんで早速お利益ごかしを陳べて國王を丸め込む、日本人の傭教師を追出して露西亞人を跡釜に棲込ませる算段をする、從來傭教師の期限を伸ばして其上に月給引上を往生づくめに承知させる。迅雷耳を蔽ふに遑あらざる中に歩一歩外交の勢力を進めて来る。此敏捷活潑な措置と比べると、日本の間抜けさ加減は……』

と豊崎は激しく物言ふ能はざる如く口を緘んで了つた。島根は一と皿の肉を平げて手巾で口の端を拭きながら椅子の背に凭れ、眼邊に微笑を含みつゝ豊崎を見た。

『實に君、齒痒いやうです。』と暫らくして豊崎は喟然さげとして大息した。『例へば愚鈍の大盡つゝが遊女に嫌られて氣を揉むと同様ですナ。高が遊女風情に堂々たる紳士が愚痴手紙や誓文を書いて心中立を見せたら人は何といふでせう。恐らく天下の物笑ひでせう。弱國を扶掖するの大國の度量を示すのと仁義らしい事

をいふが、實は手も足も出せぬエ神經外交のお茶を濁しておるに過ぎんです。今日列國の關係は勢力分布の爭鬭で、國民澎漲の勢力強大なるものが小國を兼併するは當然の道理で憚る筈がないですナ。國際法如きは畢竟強國が弱國に油斷をさせる權變に過ぎんです。現に海牙^{ヘイグ}で平和會議がある。露帝^{ザール}が軍備擴張中止案や交戰條規を持出す。ウエルヘルムが戰爭論者のシテンゲルに廢棄^{ぶちこ}させる。加之もボワで議事が進行する最中に英國はトランスブル脅迫の出師準備をする、露國は蒙古鐵道の北京延長を強請する、佛國は蒙^{モン}自事件に嚴談を申込む。何の平和會議が洒落臭い、三歳兒を騙すに等しき滑稽茶番に過ぎんワ。然るに君、』と腕を扼して咳一咳し、十五萬噸の海軍と二十萬の陸軍を有つ日本が、十年の征韓論に頓挫して以來貧弱の朝鮮にすら輕蔑され通して、食客が主人の顔色を見て奉公人にまで怯々して御機嫌を取るやうな汚ない所爲をしておる。堂々たる大帝國が弱國の鼻息を窺ふに汲々として、而も常に御機嫌を取損つて泣寐入するとは何たる醜態——不面目極まりますナ。抑も二十七八年の役に舉國一致して軍事に力瘤を入れ、素寒貧の我々書生までが墓口の底を叩いて恤兵部に寄附したのは何故です。日本が三十年來の屈辱を脱して東亞の大陸に……』

と豊崎は氣昂つて半分残つてゐる麥酒の覆るゝばかり洋蓋^{ヨウガイ}を手荒く舉げて、トンと卓を叩かうとした時、『一杯厭じやう、』と島根は唐突に沈着拂^{おちつきはら}つて洋蓋^{ヨウガイ}を厭^さしつゝ莞爾り微笑した。

『う、う』と豊崎は今や高潮に達せんとする大演説の鋒先を矢庭に折られて氣合を抜かれたやうに行詰つて不承々に洋蓋を受けた。

『先ア可いワ、』と島根は豊崎の洋盞に麥酒を酌ぎながら、『我々の内閣が出来たら君を朝鮮公使に推薦しやう。』

『むゝ、』と豊崎は力の抜けた返事をして浪々と注ぎたる麥酒を一ト口飲んだ。で、不平顔をして無言で庖丁と肉刺とを握んで今まで手を着けなかつた皿を征伐し初めた。

『朝鮮公使!』と憶出したやうに呟いて口をモク、動かしながら間の抜けた顔を上げた。

『其時は君の經綸を自由に行つて見るサ。』

『むゝ、面白い。』と庖丁の柄で卓をト、と叩いた、『大に手腕を奮つて見せませう。朝鮮經略なら我輩非常な大抱負があるです……』

と言掛けた時、給仕人^{ウェイター}は鬨を排して突然顔を出した。豊崎は呆れた顔をして顧盼き、島根は其の呆れた顔を見て微笑し、給仕人は呼ばれて用事が無いので不平顔をして引退つた。

『時に、』と島根は復たもや長演説の初まりさうなを外さうとして、『君は現在^{いま}、何をしておる?』

『我輩かネ?』と豊崎は機械的に反問して麥酒をドク、酌ぎながら長演説の文句を考へてゐるらしかつた。

『奈何して生活^{リイフ}してゐる?』と重ねて質問して島根は昵と豊崎の顔を見た。

『生活?』と豊崎は口頭で空に返事をしつゝ庖丁と肉刺とを忙がしさうに働かしてゐた。

『奈何して生活してゐる?』

『生活？』と最後の馬鈴薯を頬張つてから洋盞を手に挙げつゝ、『生活は度外に置く。何等の方法も講じませんナ。』

『困るだらう？』

『困ります、』と豊崎はひと息にグツと満引してゲエツと胸撫下した。『困ります。困りますが、苟くも天下を憂ふる志士は生活に齷齪しませんナ。我輩が經營慘憺するは國家百年の業で、朝三暮四の生活如きは……』

『豪い大氣焔だ、』と島根は眼邊に微笑を寄せながら麵包を引割いて、『だがノウ、如何なる大豪傑も麵包が無ければ……』

『むゝ……麵包が無いと自づから元氣が沮喪する、』と豊崎は再び滔るゝまで手酌したる麥酒を半飲んで、『我輩も敢て伯夷叔齊を理想とせんから、困ります、随分困ります……だが島根君、生活は閑問題です。止むなくんば貴處の家へ轉がり込みますナ……』

『はツはツ、蟲の好い男だ、』と島根は身を反らして笑出した。『だがノウ、妻君や兩親は？』

『女房や兩親ですか——故郷に在ますよ。』と豊崎は一向無頓着に平氣な顔をして、『國を憂ふるものは家を懷ふておる時間が無いです。幸い家の奴は我輩の不人情に愛想をつかして弟めが萬事を賄つてますからナ、大に安心です。』

『厄介な兄貴だナ』と歎息するやうに眉を蹙めて、『弟は何をしておるい？』